



●青の洞門

紅葉の名勝地耶馬溪（やばけい）を通して、福岡県との境にある大分県北部の都市、中津市に入る途中に「青の洞門」があります。江戸時代後期に、自らの罪業の念から出家し、滅罪のための全国行脚の旅の途中、この地に立ち寄った禅海和尚が、断崖絶壁に鎖のみで結ばれた難所で通行人が命を落とすのを見て、トンネルを掘り安全な道を作ろうと決意し、ノミと槌だけで30年の歳月をかけて掘り抜いたといわれています。このときに使用したノミと槌などの道具は、いまも近くのお寺で見ることができます。明かり採り窓などの一部に手掘りのノミの跡がいまでも残っています。この話を題材にした『恩讐の彼方に』は、大正時代に発表された菊池寛の感動を呼ぶ短編小説の題名です。さて、禅海和尚（小説では了海）が一人の人間として、自分の一生をかけるに値する難仕事に取り組むといったような大きな決意は、どのようにして生まれてくるものなのでしょうか？ 人が人生を決定する決断をする際には、その根底にどのような「心の動き」があるのでしょうか？ 今回はこの問題を考えてみたいと思います。

なかの・しげゆき 岡山大学医学部卒。スタンフォード大学医学部臨床薬理学部門に留学。大分医科大学臨床薬理学教授、大分大学医学部附属病院長、大分大学学長補佐などを歴任。大分大学名誉教授。大分大学医学部創薬育薬医学教授、国際医療福祉大学大学院教授を経て現職。日本臨床薬理学会名誉会員（元理事長）・専門医・指導医、日本臨床精神神経薬理学会名誉会員（元会長）、日本心身医学会功労会員・認定医・指導医、日本内科学会認定医、臨床試験支援財団理事長。響き合いネットワーク連絡協議会理事長として、医療コミュニケーションを学ぶ全国的なワークショップ（大分、岡山、東京、長崎、山形、湯布院）の企画・運営に携わっている。
http://www.med.oita-u.ac.jp/pharmaceutical_medicine/index.html



●生涯持続する情熱

筆者が学生時代に多大な影響を受けたアルベルト・シュヴァイツァー（1875～1965）は、ドイツ人の神学者・哲学者・医師・オルガン奏者・ノーベル平和賞受賞者です。マザー・テレサやガンジーと並び賞される、20世紀を代表するヒューマンリストの一人です。「密林の聖者」とも呼ばれていました。子供の頃から「同じ人間なのに、なぜ自分だけが他の子供たちと違って恵まれた生活をしているのか」と、本気で苦悩した体験が彼の一生を決定づけているように思います。21歳のとき、窓から差し込んでくる朝陽の光を眺めていて、「30歳までは自分のために生きて、芸術と科学を身に付けることに専念し、30歳からは世のため人のために尽くす生き方をしよう」と決意します。名門ストラスブール大学を卒業し、神学博士・哲学博士を取得し、若くして教授職を得たのち、30歳のとき、大学教授を辞して、同じ大学の医学部に入学し直します。38歳で医学博士を得たのち、当時医療と心の貧困に困り、「医師にして宣教師」を求めているアフリカにあるガボンのランバレネに、すべてを投げ打って旅立ちます。その後、彼の思想の代名詞ともいえる「生命への畏敬」という概念にたどり着き、世界平和を目指す活動へとつながっていきます。筆者が医学部を卒業した1965年に、90歳の天寿を全うし、ランバレネの地で永遠の眠りについていました。

シュヴァイツァーは、自伝を含む多くの著作を残していますが、人生における決定的に重要な二つの決意、つまり、30歳からは自分のためではなく、世のため人のために生きようとする決意と、医師になってランバレネに行くという決意をする場面は、実に淡々と記載されています。気持ちの盛り上がりではなく、むしろ記述の「淡々さ」が、強烈な印象として、いまも筆

者の心の底に残っています。心から求め続けていたもので、長年求めてきたものが、「これだ！」と瞬時に判断できたのだらうと思います。「感動」を心の奥深くで体験していたからこそ、決断したときのことは抑制した淡々とした表現の語りとなり、実際に行動する際の生涯持続する情熱となって、前人未到の難事業が成し遂げられたのではないのでしょうか。禅海和尚についても、同じような印象を持ちます。

●「迷い」が解けた瞬間

上記のような偉大な決意の例は、むしろ例外に近いかもかもしれませんので、もう少し身近な例として、若き日の筆者の体験を二つ取り上げてみたいと思います。悩み多き高校生時代に、理屈ではなく、「感動」が人を動かしたエピソードです。

一つ目は、高校2年生の秋の運動会での思い出です。岡山県内随一の進学校である県立高校の、しかも男子だけの進学クラスに身を置きながらも、受験勉強三昧の高校生活という日々がどうしても納得できなくて、「なぜこんなに勉強しなければならないのか」という疑問が頭から離れなかった頃のことです。そのような悶々とした日々を過ごしていたとき、平素の高校生活とは全く異質の一日となった運動会があったのです。1学年上の3年生のやはり男子だけの進学クラスの全員が、マラソン競技に参加して、しかも全員が整然と隊列を組んで、最後の最後にグラウンドに帰ってきたのです。掛け声を全員がかけながら、トラックを一周して、最下位でゴールインしたのです。その光景を眺めながら、理屈ではなく、ただ感動していました。感動した理由はあとで何とでも説明できるのですが、「感動した」という事実そのものが重要でした。苦しい受験勉強は、人の何かを鍛えて、他の人に「感動を与える」

だけの何かを産むのではないかと、そのとき初めて感じたのだと思います。無味乾燥の受験勉強といえども、自分に負けることなく、苦しい努力を重ねることに意義があるのではないかと、初めて気づいた体験でした。受験勉強三昧の生活にまつわりついていた「迷い」が解けた瞬間だったのです。

二つ目は、人生の進路を決める大学選びについての思い出です。高校3年生の終り頃で、すでに寒い季節が訪れていました。子供の頃からの医学部志望は変わりませんでした。東京に出て学んでみたいという多くの若者と同じような夢を、筆者も抱いていました。優れた進学校でしたので、進路指導もそれまでに蓄積されたデータに基づいてきめ細くなされていました。筆者は京都の大学を受験することを勧められました。浪人してでも東京の大学に進学すべきかどうか、と悩んでいた時期でしたが、たまたま眺めていた地元新聞に、石井十次を紹介した記事が出ていたのです。石井十次（1865～1914）は明治時代の慈善事業家で、「児童福祉の父」といわれた岡山孤児院を創設した人物です。岡山で医師を目指して岡山医学校（現在の岡山大学医学部）の医学生として研修中に、ある孤児を引き取ったことを契機にして、キリスト教信仰に根ざした岡山孤児院を創設し、医師として働くことを断念して、生涯を孤児救済に捧げた方です。この記事を読んだときも、ただ感動していました。地元の岡山大学医学部を受験することに、心が決まった瞬間でした。

人は「理屈」だけではなかなか動けなくても、強く求める心があるときに「感動」が生まれる体験をすると、ごく自然に次の一歩が踏み出せるものようです。